月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.108



『軌跡』シリーズ
始まりの物語を振り返る
英雄伝説 空の軌跡

ジェニス王立学園に結社の手が！
英雄伝説
空の軌跡SC〜絆の在り処〜

2020年のスタートを
飾るのはこの衣装！
『英雄伝説 暁の軌跡』
ファルコムニュース

メインキャラクターの第一陣として
特務支援課メンバーが登場！

『英雄伝説 創の軌跡』



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

ロイドたち特務支援課メンバーの新ビジュアルが到着!!



2020年夏に発売される『軌跡』シリーズ最新作『創の軌跡』。初報で3人の主人公が登場することが明かされていたが、今回はそのなかのひとり、『零の軌跡』『碧の軌跡』で主人公を務めたクロスベル警察のロイド・バニングスをはじめ、おなじみ特務支援課メンバーの新ビジュアルが到着！

『英雄伝説 創の軌跡』公式ホームページ
https://www.falcom.co.jp/hajimari/

タイトル：英雄伝説 創の軌跡　**発売日**：2020年夏予定　**ジャンル**：ストーリー RPG
対応機種：PlayStation®4　**プレイ人数**：1人　**小売価格**：未定　**CERO レーティング**：審査予定

※画面は開発中のものです。



頑張ろう――これからも
この街と市民たちを守れるように。

ロイド・バニングス

クロスベル自治州で起こった数々の難事件を解決した、熱い正義感と不屈の魂を持つクロスベル警察《特務支援課》のリーダー。
帝国によるクロスベル占領後、重要参考人として指名手配を受けたロイドは支援課が保護していた少女・キーアとA級遊撃士アリオスと共に追っ手から逃れつつ、クロスベル解放に向けた地下活動を地道に続けていた。
その後、約2年数ヶ月の歳月を経てクロスベルの解放を成功させたロイドは当時のオリジナルメンバーと共に再び《特務支援課》の活動を再開することに。活動再開を喜ぶ市民の声を受けつつ、ロイド自身も「再独立調印式」の日を心待ちにしているが……。



エリィ・マクダエル

クロスベル議長ヘンリー・マクダエルの孫娘にしてリーダー補佐として《特務支援課》を支える才色兼備の女性。
クロスベル占領後、《特務支援課》が解散となってからは幼少期からの留学経験や優れた政治感覚を活かして帝国要人やRF（ラインフォルト）グループとの接触を図るなど独自にクロスベル再独立の道を模索していた。
再独立決定後はロイドらとともに《特務支援課》の活動を再開。現在は支援要請をこなしつつ、「再独立調印式」に代表として出席する祖父・マクダエル議長の秘書として政治外交をサポートする日々を送っている。



私たち、これまで本当に
色々な人に支えられてきたのね――







ティオ・プラトー

《特務支援課》メンバーにして、エプスタイン財団・クロスベル支部に所属する若き研究主任。
帝国によるクロスベル占領後は情報局による監視を受け、行動が制限されるという状況に置かれながらも水面下でロイドらに協力。
その過程で帝国の新旧Ⅶ組や周辺諸国の導力技術者たちと連絡を取るようになり、ＲＦグループのアリサ・ラインフォルトやリベールからの留学生、ティータ・ラッセルらと親交を深めていった。
《特務支援課》活動再開後はオリジナルメンバーの一人として現場に復帰。更に、研究主任としてＺＣＦ（ツァイス中央工房）やＲＦグループとも連携するなど、導力研究者としての道も歩み始めている。

この2年間を乗り越えてきた
わたしたちなら、
きっと……！





ランディ・オルランド

猟兵団《赤い星座》に所属していた過去を持つクロスベル警察《特務支援課》の頼れる兄貴分。
クロスベル占領後は初代総督ルーファス・アルバレアの策略によって仲間と引き離され、トールズ第Ⅱ分校で教官を務めることとなったがそれをきっかけに帝国で教官としての経験を積み、新旧《Ⅶ組》をはじめとする数多くの人々と固い絆で結ばれていった。
クロスベルの再独立が決定し、教官としての任期が終了したランディは帰国を決意。
後進を育成するという分校での仕事に若干の後ろ髪をひかれつつも、クロスベルの地で、再び《特務支援課》の活動を再開することとなった。

俺は帝国で何度も見て来たぜ――
苦難の道を歩みながら、
光を見出してきた連中をな。







ノエル・シーカー

重火器の扱いと車両の運転技術に長けた、クロスベル警備隊の次期エースと目される女性隊員。
一時期は出向メンバーとして《特務支援課》の活動に参加し、ロイドらと共に多くの難事件を解決へと導いた。
帝国によるクロスベル占領時は密かに警備隊の有志たちと連携してレジスタンス活動に身を投じ、軍事方面の情報収集を行うなど陰でロイドたちに力を貸していた。
再独立決定後、再編された警備隊に復帰したノエルは“曹長”から“三尉”へと昇進。「再独立調印式」を控え、現在はソーニャ司令の指揮下で警備隊の任務に就いている。

言ったじゃないですか、
あたしたちも支援課の一員だって！





ワジ・ヘミスフィア

中性的なルックスが人目を惹く神秘的な青年。星杯騎士団に所属する守護騎士で第九位《蒼の聖典》の名を冠している。
かつては身分を偽ってクロスベル旧市街に潜伏し、不良グループ「テスタメンツ」の少年たちを陰ながら導いたり、《特務支援課》の追加メンバーとしてロイドと行動を共にするなどクロスベルで様々な活動をしていた。
占領後はクロスベルを離れ、守護騎士として諸国を飛び回っていたが七耀教会の「再独立調印式」参加に伴い、新たな相方（パートナー）たちと共に縁深きクロスベルの地を再訪することに。

優秀な相方（パートナー）たちに囲まれて
つくづく果報者だよね、僕って







KEYWORD

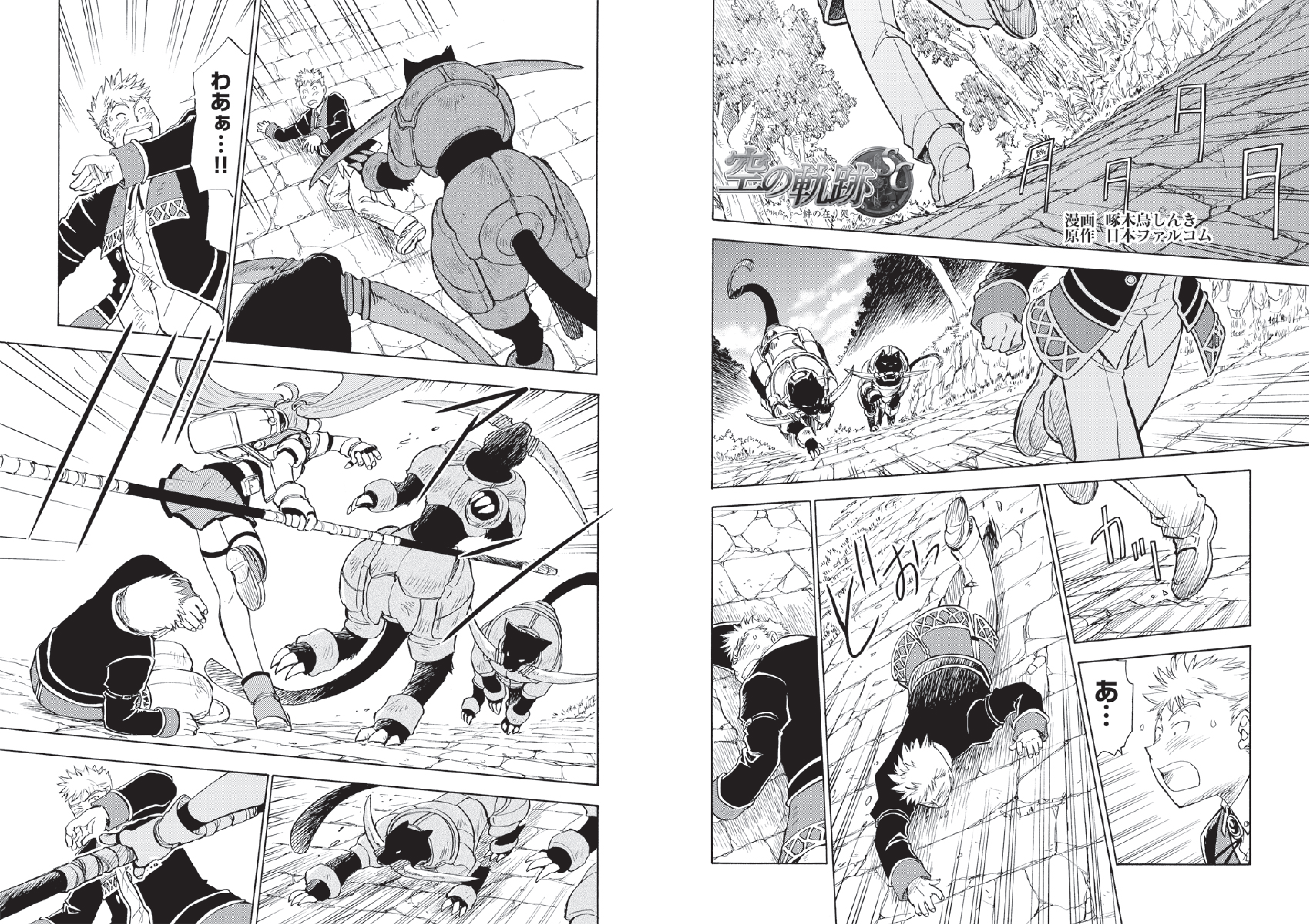
クロスベル自治州

エレボニア帝国、カルバード共和国という二大国の狭間に位置し、巨大貿易都市として発展を遂げた自治州。約70年もの間、二大国の圧力を受けながらも自治州として存続していたが七耀歴1205年、帝国軍によって併合されたクロスベルは属州として統治下に置かれることとなった。
その後、エレボニア帝国、カルバード共和国に加え周辺諸国をも巻き込んだ“世界大戦”の停戦に伴い、クロスベルに駐留していた帝国正規軍の撤退が決定。
これに反発した総督府治安部隊が市内全域を占領するという事件が発生するものの、《特務支援課》をはじめとする人々の活躍によりクロスベルの解放に成功。
そして――七耀歴1207年。
帝国の占領から2年数ヶ月の時を経て、アルテリア法国承認のもと、再びクロスベルの自治権が認められる「再独立調印式」を迎えることとなった。

クロスベル警察・特務支援課

クロスベルの治安維持組織「クロスベル警察」が遊撃士協会に対抗するため七耀歴1204年に設立した部署。当初は「市民の人気取り」だと揶揄され、市民からも軽視されていたがクロスベルで起きた数々の難事件を解決していく中でその存在意義が見直され、人々からも信頼を集めるようになっていった。
帝国によるクロスベル占領をきっかけにクロスベル警察が「クロスベル軍警」として再編され、《特務支援課》も事実上解散状態となってしまったものの、その後、ロイドらの活躍によりクロスベルの解放に成功。
市内の治安維持を目的として即座に軍警が解体され、クロスベル警察／クロスベル警備隊としての再編が決定。元警察官、警備隊員の多くが現場への復帰を果たした。
また、その過程で《特務支援課》の再始動も決定し、セルゲイ課長指揮の下、オリジナルメンバーであるロイド、エリィ、ティオ、ランディが支援課の活動を正式に再開させることとなった。




空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
カッ
あ…
わぁぁ…!!


あ
あんたら…
話はあとで!
こいつらを追い払うから!
いくわよヨシュア!
うんエステル
けっこう手強い
なんなのこの魔獣
気をつけてエステル!
簡単に蹴散らせる相手じゃなさそうだ!
一気に攻めて落としていこう!
了解!


ドサ…
やっつけた…かな？
これ…絶対…普通の魔獣じゃないわよね？
うん…よく訓練された…
おそらく結社が使う装甲獣だよ


結社!?
どうしてこんなところに結社の魔獣が…
…でも
間に合ってよかった
はぁぁぁ……〜〜〜
エステル…それにヨシュア…
すまねぇ…危ないところを助けてくれて…
もぉ〜
ミック君！
いくらなんでも学園の外まで出てきちゃうのはまずいわよ
まだ学園は授業の時間なんでしょ？
こんなところでサボってるのがばれたらまたジルにどやされるわよ
ち違うんだ
あ…いや…
そこんとこは違わないんだけど…
ミック落ち着いて
いったい何があったんだい？


お…俺…
いつものように校舎裏で授業をサボってたんだけど…
ほらー
やっぱりサボってたんだ
そ…そしたら
いきなり…


それってまさか…
結社の兵士たちなんじゃないの!?
そんなのわかんねぇよ
用務員のオッサンが止めようとしたんだけど
そ…そいつら…
銃で…
オッサンを…


そ…
そんな…
俺…頭が真っ白になっちゃって…
助けを呼ぼうとここまで逃げてきたんだけど…
事情はわかった
ありがとう
学園の危機を知らせてくれて
あとは僕たち
遊撃士に任せてくれ!
エステル
彼と一緒にルーアンの街へ行ってくれるかい?
え
協会に報告して
できれば応援を連れてきてほしい
その間に僕が
学園内の様子を調べてくるよ


ヨ…ヨシュアひとりでなんて危険すぎるって!
あいつら集団で襲ってきたんだぜ!?
で…でも
だからこそ敵戦力と学園のみんなの状況を調べる必要があるんだ
偵察だけなら単独で行動した方が成功率は高くなるしね
ヨシュア
ひとつだけ確認
あの時の約束…覚えてる?
大丈夫!
絶対に忘れないから
気をつけてねヨシュア!
次回に続く

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

「キャラ印.COM」より『英雄伝説閃の軌跡Ⅳ／軌跡シリーズ』オリジナル新作グッズ第2弾の発売が決定！

TOSYO株式会社がサービス提供を行っているグッズ通販サイト「キャラ印.com」で、「閃の軌跡Ⅳ／軌跡シリーズ」の新作グッズがついに発売！
キャラ印のTwitterアンケートで「空」・「零碧」・「閃」の３タイトル合計12000票を超える投票によるファンの声からグッズを開発!!



■新アイテム・軌跡の魅力があふれるアクリルブロック

軌跡シリーズのイラストで描かれる美しい空の数々。エステルとヨシュアが描かれた〈世界の中心で〉は、背景の空の青さと、雲、そして舞う羽が差し込む光によってキラキラと輝く。まさに“空の軌跡”が見られるアイテムとなっている。
「閃の軌跡Ⅳ」からはエンディングカットの集合写真が使用されている。「Ⅳ」で完結となった「閃の軌跡」シリーズ。その長い旅のラストを締めくくった〈晴れ渡る空の下〉。オリビエとシェラの挙式に集まったリィンたちの記念の一枚をぜひお部屋に飾ってほしい。
アクリルブロックは窓際やデスクの周りに飾るのはもちろん、ペーパーウエイトといった使い方もできる。





■軌跡の旅路を振り返る―パズルが新登場！

軌跡シリーズにある、隠された謎が少しずつ明らかになっていく様やアイテム収集の要素がパズルとして形になった。アンケートの結果を基に、「空」、「碧」、「閃」の３タイトルからそれぞれ１つずつアイテム化。さらに、軌跡ファンにはぜひ挑戦して欲しい、「エレボニア帝国地図」を加えた全４種類がリリース。「エレボニア帝国地図」は新旧Ⅶ組が実習で訪れた地、リィンたちの足跡を辿ることができる。

■アクリルフィギュアボックス、壁掛け時計などの新作も続々登場！

アクリルフィギュアボックスの新作として『閃の軌跡Ⅲ』から「トールズ第Ⅱ分校」、『閃の軌跡』から「Ⅶ組、男子」が追加。
アクリル壁掛け時計にも新デザインが追加され、『閃の軌跡Ⅱ』のイラストより、「灰と蒼の起動者（ライザー）」が登場。半透明の背景がかっこいい仕上がりとなっている。
マスキングテープはＳクラフトのカットが描かれた「リィン＆クロウ」、「ユーシス＆マキアス」の名コンビが描かれている。
さらに、ミニウォレットポーチは要注目。リィンとクロウの絆の証ともいえる「50ミラ」。この50ミラをモチーフに、リィンとクロウのイラストをデザイン。こちらは「50ミラ」にちなんで、数量限定50個での販売。追加販売の予定はないので、売り切れ前にぜひ手に入れて欲しい。





■商品名:『英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ／軌跡シリーズ』キャラ印.comオリジナルグッズ
■販売ページURL:https://www.charain.com/user_data/sennokiseki
■受注受付期間:2020年1月30日（木）～
■発送日:受注生産のため当月中にご注文頂きましたお客様は翌々月末日までの配送となります。

購入者先着プレゼント!
キャラ印.comの「英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ／軌跡シリーズ」をご購入のお客様に、お買い上げ合計5,000円（税別）につき1枚、トレーディングコースターを先着でプレゼント! キャラ印.comで発売中のスタンプの絵柄にもなっているSDキャラが描かれた、キャラ印.comオリジナルのコースター! 全10種の100枚限定。超レアなアイテムとなっているので、お早めに!

LINEスタンプ vol.27『イースⅨ』配信開始！

『イースⅨ -Monstrum NOX-』より、待望のLINEスタンプが登場！

主人公アドルや相棒のドギ、プレイアブルキャラクターでもある怪人たちのイラストに加え、監獄都市バルドゥークに登場する個性豊かなキャラクターたちがスタンプに！　日常のコミュニケーションに役立つ、セリフ入りスタンプ全40種で登場！



●『ファルコムLINEスタンプ』シリーズ紹介ページ
https://www.falcom.co.jp/mobile/linestamp.html

イースⅨのキャラクターたちがFalcomo Baseに登場！

1月25日（土）より「イースⅨ」公式SD商品が新発売！

缶バッジやアクリルキーホルダーだけでなく、GraffArt Shop限定フェイスタオルも販売!!

■取り扱い店舗
GraffArt Shop 池袋本店、なんば店、名古屋店内Falcomo Base

※通販サイトでもご予約受付中
http://kyaragoods.shop-pro.jp/





「閃の軌跡Ⅳ」カーテン／まくらカバー／ラバーマット／タペストリー新登場！

株式会社Key-thが運営する「カーテン魂」にて『英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ -THE END OF SAGA-』の美麗なEDイラストを使用した、カーテン／まくらカバー／ラバーマット／タペストリーの発売が決定した。販売期間は2020年4月末まで。お見逃しなく！



カーテン（横200cm×縦130cm／横180cm×縦130cm）



タペストリー



枕カバー　表



枕カバー　裏



枕カバー　表



枕カバー　裏







ラバーマット

■販売サイト
https://www.curtain-damashii.com/item/tag/senfs/ss



THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。2020年の衣装替えキャラクター第1弾は「新選組」！　リィンたちの勇ましい姿を見ていこう。

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

1月の新／衣装替えキャラクターをチェック！

「新選組」衣装の衣装替えキャラクターが続々実装！

新選組・リィン

浅葱色の羽織を纏い凛々しい表情を見せるリィン。もともと八葉一刀流の使い手で太刀を扱うだけに、相性はバツグンだ！

新選組・クロウ

豪快にダブルブレードを振る舞わすクロウ。勇ましい立ち姿はまさに新選組に相応しい！

新選組・シャーリィ

新選組衣装にシャーリィがまさかの登場!?　新選組に女性隊士がいた記録はないものの、シャーリィなら美少年隊士としてもやっていけるはず？

2月の新規衣装替えキャラクターは？

※画像は開発中のものです。　※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

『創の軌跡』の発売を記念して

『軌跡』シリーズの原点を振り返る！

英雄伝説 空の軌跡1

～消えた飛行客船～

第1回



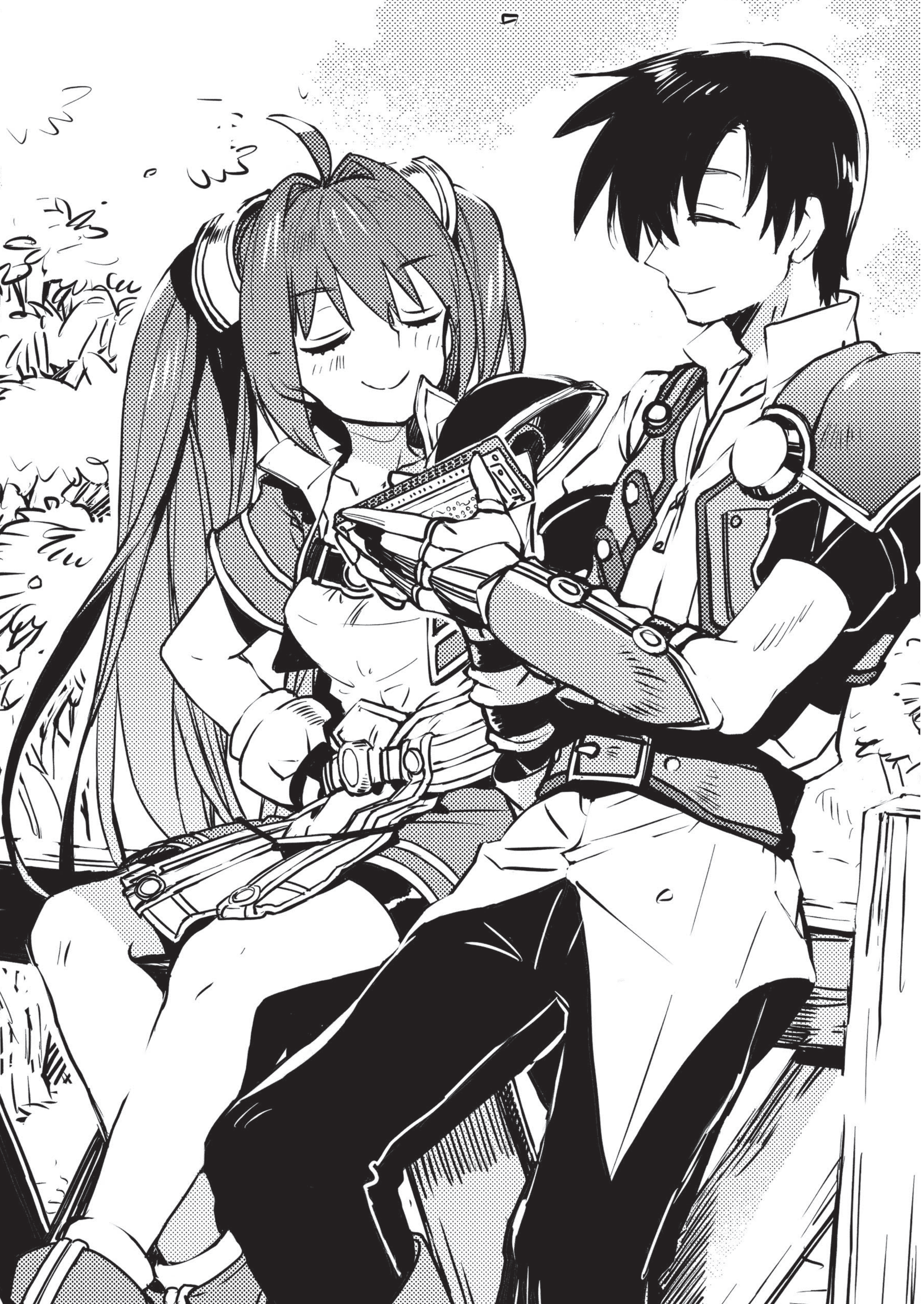
リベール王国を舞台とした『英雄伝説 空の軌跡』、クロスベル自治州を舞台とした『英雄伝説 零の軌跡』と『英雄伝説 碧の軌跡』。そして、エレボニア帝国を舞台とした『英雄伝説 閃の軌跡』。これまでゼムリア大国西部の各国を舞台として物語が紡がれてきた『軌跡』シリーズ。2020年夏に発売が予定されているシリーズ最新作『英雄伝説 創の軌跡』は、これまでのシリーズに登場したキャラクターや世界観をより掘り下げていく作品ということで、今号より、シリーズの原点ともいえる第１作『英雄伝説 空の軌跡 FC』のノベライズをお届けしていく。

製品情報

好評発売中

著　　:はせがわみやび
イラスト:ワダアルコ
定　　価:1,200円(税別)

序章　父、旅立つ



カーテンの隙間を抜けて朝の日差しが部屋に差し込んでくる。

明るい光の筋は、ベッドで寝ているエステルの、まだふくらみの足りない胸元からのろのろと這いあがり、ようやく子どもっぽさの抜けてきた顔を照らした。

「……まぶし…………」

目を開ける。

「なにか聞こえる」

澄んだ音色がエステルの耳の奥で木霊（こだま）していた。ヨシュアの吹くハーモニカの音だと少し遅れて気づく。

『星の在り処（ありか）』、だ。

ヨシュアの好む曲。エステルも大好きな曲だった。

明るい旋律なのに何処か切ない。

「あは、もう起きてるみたいね。そうでなくちゃ！」

今日はエステルとヨシュアの二人にとって特別な日。
ヨシュアがエステルの家に来てから五年が経っていた。
二人とも十六歳になっていて、そして十六といえば《遊撃士（ブレイサー）》になれる歳だった。遊撃士協会の研修を無事に終わらせれば、二人とも遊撃士への第一歩を踏みだせる。
エステルは二階の廊下からテラスへとまわった。
「おはよ、ヨシュア。や〜、お姉さん、思わず聴き惚れちゃったわ」
「なにがお姉さんだか……。僕と同い年のくせにさ」
朝の陽射しのなか。テラスに出ていた黒髪の少年が言った。手にしたハーモニカが陽を受けて光っている。琥珀色の瞳がエステルを見つめてきた。
二人とも、どちらからともなく微笑み合う。
「おーい。エステル、ヨシュア」
階下から二人を呼ぶ父の声に、エステルとヨシュアは階段を降りていった。
三人でいつものように食卓を囲む。
「今日で研修も最後だね！　これで晴れて遊撃士かあ」
スクランブルエッグの残りをスプーンで口のなかに放り込みながらエステルが言った。
「そんなに甘くないと思うけど」
「ヨシュアってば、なんで暗い予想しかしないかな」

「君が能天気すぎるんだと思うよ」
二人のやりとりを眺めながら父が笑った。
それはいつもの朝の風景だった。
微笑みながらも父が言う。
「遊撃士は簡単な仕事じゃないぞ」
「わかってるもん。それでも、あたしは遊撃士になるから！」
父の胸元を飾る遊撃士の紋章を見つめながらエステルは言った。
遊撃士――。
魔獣退治や犯罪防止、荷物の護衛から落し物の捜索まで、様々な形で地域に貢献する仕事をこなす戦闘・調査・護衛のスペシャリストである。
だが、エステルにとってはそれだけではない。
遊撃士はこの国が無くなるのを防いでくれた人たちであり、忌まわしい戦争を終息させてくれた人たちのことだった。
エステルたちの住むリベール王国は、大陸の西部に位置し、豊かな自然と伝統に育まれた、大陸でも有数の《七耀石（セプチウム）》の産地だった。
七耀石――《導力》と呼ばれるエネルギーの源であるこの鉱石を産出することで、リベールは世界でも最高水準の《導力器（オーブメント）》技術を持つに至った。

だが、優れた技術は良いことばかりをもたらさない。
この導力器を巡って戦争が起こった。
リベール王国の導力器技術と七耀石に目をつけた北方のエレボニア帝国が、侵略戦争を仕掛けてきたのだ。
後に《百日戦役》と呼ばれることになる戦争である。
十年前――エステルが六歳のときだった。
リベール王国は、多大な犠牲を出しながらも帝国の侵略を辛うじて退けたのだが、このとき戦争を終わらせるための講和に大きな貢献をした組織があった。
それが大陸全土に支部をもつ遊撃士協会（ブレイサーギルド）である。
協会の活躍もあって、激しい戦争はなんとか終結したし、リベール王国は侵略されることを免れた。そのために助かった命は多いと言われている。
遊撃士たちはリベール王国の民にとって英雄なのだ。
父カシウス・ブライトも、この遊撃士協会に勤める遊撃士だった。
「あたしはぜったい遊撃士になる！」
十年間繰り返した言葉を今日もまた口にする。
それはエステルの誓いだった。
朝食を終え、エステルとヨシュアは遊撃士協会の支部のあるロレント市を目指して家を出た。

† † †

研修の最終日は実技試験だった。
市の地下にある水路の奥から指定された物を持ちかえれと命じられ、水路の魔獣に手こずらされつつも、エステルとヨシュアは無事に地上へと戻ってきた。
二人は試験を突破したのだ。
「エステル・ブライト。ヨシュア・ブライト」
試験官を務めてくれた女性遊撃士のよく通る高い声が響く。
研修の仕上げを任されたこの遊撃士の名はシェラザード。父カシウスとも親しくしている遊撃士で、幼いときから「シェラ姉」と呼んでエステルは慕っていた。
彼女はエステルとヨシュアに向かってかしこまった声で宣言する。
「本日15：00をもって、両名を《準遊撃士》に任命します」
その言葉を聞いて、エステルの胸に十年間の積もり積もった想いが押し寄せてくる。やった……と、心のなかで拳を握って叫んでいた。
ぼそっとヨシュアがエステルだけに聞こえる声でつぶやく。
「エステル、顔がにやけてる」

「あっと……」
　両手で顔をはさんでにやけた顔を元に戻した。
「まったくもう……ふふ。ええと、では以後は、遊撃士協会の一員として人々の暮らしと平和を守るため、そして正義を貫くために働くこと！」
　そう言いながら、シェラザードが小さな箱をエステルとヨシュアに見せた。
「ん？　その箱って……」
　シェラザードがにこっと微笑む。
　その小箱は、二人が地下水路から取ってきたものだ。
「よく我慢したわね、エステル。この箱の中身を見ていたら失格だったのよ」
「げっ！」
　思わずエステルは声をあげてしまった。
　シェラザードが眉をひそめる。
「あなた……まさか」
「みみ、見てない。見てないってば！　ね、ヨシュア、見てないよね！」
「まあ……あぶないところだったけどね」
「まったく……」
　ため息をつきながらシェラが小箱の蓋を開けて、二人になかを見せた。

「あ」
「それって……」
　箱には憧れていた《準遊撃士の紋章》——翼のついた楯に鋼の手甲が重ねられた紋章——が入っていた。
　紋章を二人に渡しながらシェラが微笑む。額にかかった髪の奥にある瞳の色が優しい。
「おめでと。これからはお仲間ってわけね」
「仲間……！」
　その言葉にエステルは胸がいっぱいになった。
　目の前の遊撃士は今までは憧れる対象だった。今でも尊敬の対象だ。けれど、今日からはそれだけではない。若手遊撃士のなかでも一、二を争う《銀閃のシェラザード》の、自分は「仲間」になったのだ。
「やったねヨシュア！」
「僕が遊撃士か……」
「ヨシュアってば、もっとパーッと喜ばないと！」
　エステルの言葉に、シェラザードが苦笑混じりの笑みを浮かべた。
　用事があるからと彼女が立ち去ると、エステルは手に入れた準遊撃士の紋章をもう一度ためつすがめつしてしまう。口許が思わずゆるみっぱなしになる。

「エステルってば、だから顔がゆるみすぎだよ」
ヨシュアになんと言われてもエステルは平気だった。
「じゃ、父さんの買い物を済ませてから帰ろうよ！」
早く家に帰ってこの紋章を父に見せたい。
「はいはい」
支部の建物を出た頃には日が傾いて夕方になっていた。
父に頼まれた買い物を道具屋で済ませ、さあ郊外の我が家へと戻ろうとしたところで、エステルたちを呼び止める声があった。
「エステル、ヨシュア！　いいところで見つけたわ！」
声に振り返ると、遊撃士協会支部の受付嬢をしているアイナが通りを走ってくる。
エステルたちの前までくると立ち止まり、膝に手を当てた。息が荒い。
「どうしたんですか？」
ヨシュアが問いかける。
アイナはやけに急いでいて、顔が真剣だった。
「はあはあ。す、少し面倒なことになったの。あなたたち、ルックとパットの二人を知ってるわよね？」
エステルは頷いた。
良く知っている。ロレントの街に住む生意気盛りの子どもたちだ。
「二人とも、北の外れにある古代の遺跡に向かったまま、まだ戻ってこないの！」

†　†　†

古代の遺跡を探検してくる。
ルックとパットはそう言い残したらしい。
遊撃士協会の受付嬢アイナから話を聞いて、エステルとヨシュアも心配になった。
もう、夕暮れに近い時間だ。
そして古代の遺跡のなかには恐ろしい魔獣が出るという噂もあるのだ。
支部にはあいにく遊撃士たちが誰も詰めておらず、これから探して連絡を取るにしても、間に合うかどうか微妙なところだという。
「あたしたちが行きます！」
エステルはきっぱりと言った。
「急げば、遺跡に入る前に捕まえられるかもしれない」
こういうとき、ヨシュアはエステルを止めない。言っても無駄な事をいちばん良く知っているのがヨシュアなのだ。

「わかったわ。こっちも手の空いている遊撃士を探して、後を追ってもらうから」
「お願いします、アイナさん」
　アイナが頷いた。そのままきびすを返して、支部へと戻っていく。
「よし。走ろう、エステル」
「うん！」
　街の出口から街道へ。エステルとヨシュアは、子どもたちを追って駆けだす。
　黄昏が色を濃くしてゆくなか、二人は走り続けた。
　街の郊外にある森へと辿りつく。
　そのまま森のなかへ。
　走り続けてエステルは胸が苦しくなっていた。息が切れてしまう。
　これ以上は無理かも、と思ったところで森が終わって、古い塔がいきなり姿を現した。
　古代文明の遺跡だ。
《翡翠（ひすい）の塔》と呼ばれている。
　エステルもヨシュアも知ってはいたが、まだ入ったことはない。
「あ、あの子たち……もう、なかに入っちゃったのかな?」
　呼吸を整えつつ、エステルは翠色（みどり）に輝く高い塔を見上げる。
　くぐもった獣の鳴き声が開いた扉からかすかに聞こえた。

　噂どおりになかは魔獣でいっぱいのようだ。
「こんな、アブナイところに……。ったく、あの、二人ったら……！」
「急ぐ必要がありそうだね」
　エステルの傍らで立ち止まったヨシュアが言った。こちらは息も切れていない。涼しい顔だ。
　エステルはちょっと憎たらしくなった。そんなこと言ってる場合じゃないけど。
「すぐに入ろう」
　エステルは頷く。
　深く息を吸ってから扉をくぐった。

「吹き抜けになってたんだ……！」
　エステルは呆然としてしまう。
　塔のなか。入った先には一部屋ほどの大きさの、扇を広げたような半円状の床が宙に浮くようにして広がっていた。
　扇状の床には壁もなく天井もなく。足下から十数歩先で、切り取られたように唐突に終わって、奈落へと続く穴が開いていた。
　端まで歩いて見上げれば、遥か高みまで遮るものは何もなく……。
　足下から正面には短い橋。

その橋は、吹き抜けの中央に存在する、ひとまわり細い塔へと繋がっていた。
視線を上下左右に巡らせ観察して初めてわかる。
四隅にある扇状の踊り場と中央の塔が、互いに短い橋で繋がっているという造りになっている。
塔の内側に、入れ子状に細い塔が地下深くから伸びていて、各階層ごとにある四隅の扇状の踊り場と短い橋で連結されている、と伝えればわかるだろうか。
まるで巨大な井戸のようにも思えてくる造りだ。
「なんでこんな造りになってるんだろう……」
「それも含めて謎だね」
エステルのつぶやきにヨシュアが返した。
この塔は、古代文明の遺跡だという話だ。
壁も床も翠色の石が多用されていた。壁沿いに設置されている導力灯の光を受けて、ぼんやりと輝いている。翡翠の塔と呼ばれる由縁だろう。
「ひんやりしてる……」
カビ臭い空気は湿り気を帯びており、流れていた汗がたちまち止まる。熱を奪っていって肌寒いくらいだ。
エステルとヨシュアは足下から伸びる短い橋を渡る。

中央部の細い塔を抜けて、反対側の踊り場へ。
警戒しながら進んでいった。
そこここにわだかまる闇のどこに魔獣が潜んでいるとも限らない。
壁の所々が剥がれて落ち、床石がいくつか剥げてしまっている。壁から生えるようにして付けられた導力灯も、いくつか消えてしまって点いていない。
古い古い物なのだと実感できた。
誰が、いつ、何のために建てたのかわからない謎の遺跡。今では訪れる者もなく、荒野を彷徨う魔獣——人外の、危険な獣たち——の棲み処となってしまっている。
そんな処にあの二人は入っていってしまった。
床に溜まった埃には、まだ新しい小さな足跡がぽつぽつと見て取れる。ルックとパットのものだ。いたずら好きのやんちゃな男の子たちで、いつも世話ばかり焼かせるが、だからといってここで魔獣の餌にさせるわけにはいかない。
エステルは白木の杖を強く握りしめる。
絶対、追いつかなければ。
エステルには我慢できないのだ。自分より弱いもの小さなものが、理不尽な力に曝されて不幸になることなど。それはエステルの経験してきた辛い過去が彼女の心のなかに育てた想いなのかもしれなかった。

だからこそ――遊撃士になった。
（ルック……パット……無事でいて！）
反対側の踊り場まで辿りつくと、上へと昇る階段が見えた。
足跡はまだ続いている。
二階に上がったようだねと、ヨシュアが推測を口にしたときだ。
「た、助けてぇぇっっ！」
悲鳴が聞こえた。
はっとなる。
ヨシュアと顔を見合わせた。
今のは――ルックの声だ！
「いけないっ！」
叫んだときにはエステルはもう走り出していた。階段をひとつ飛ばしで駆け上がる。
「エステル！」
背後からヨシュアの咎める声が聞こえたが脚は止まらない。
途中で折り返す階段を昇りきって上の階へ。
上階に辿りついたところで、目の前に広がった扇状の床に子どもの背中が二つ見えた。
ルックとパットだ。

魔獣に取り囲まれていた。その数、五。
今にも襲いかかろうとしている。
「うりゃあああっ！！」
魔獣たちの気を引こうと殊更に大きな叫び声をあげながらエステルは突っ込む。
一匹に、あっという間に近づく。
振りかぶった白木の杖を力任せに振り下ろした。
断末魔の悲鳴をあげて、魔獣が倒れる。
（まず、一匹！）
「次はどいつ！　相手になってやるわよ！」
魔獣に向かって言い放った。
「エ、エステルねーちゃん⁉」
「あんたたち！　危ないから下がってなさい！」
二人を背にかばうようにして立ち、杖を構え直す。
次の相手を選ぼうと視線を巡らせた。
右手のヤツが自分の死角から噛みついてこようとしているのが目に入る。
とっさに身体をひねって避けようと――
（しまった！　間に合わな――）

「せいッ！」
間一髪で飛び込んできた影にそいつは弾きとばされた。
助けてくれたのが誰なのか、見なくてもわかった。

† † †

「ヨシュア兄ちゃんだぁ！」
「エステルってば。なに、ひとりで突っ込んでるのさ！」
「お説教はあとあと！」
「ったく、この鉄砲娘め……」
何か言われたがエステルには気にしてる余裕はない。同い年なんだから「娘」呼ばわりは心外だとも思ったりもするけれど、そこに突っ込むのも後回し。改めて残った魔獣たちを睨みつける。
魔獣の正体は《飛び猫》だった。
名前には「猫」と付くものの、愛らしいペットとは、身体の大きさも気の荒さも桁が違う。獲物を捕らえるための長く硬い爪を生やし、引き裂くための大きな牙を持っている。もちろん肉食。おまけに背中からは翼まで生やしていた。まさに魔獣と呼ぶにふさわしい。今もその翼を打ち振って宙に浮いている。
対するエステルの武器は身長ほどの長さの白木の杖だ。ヨシュアのほうはダークと呼ばれる片刃の短剣を左右、両手に持っている。
二人とも、距離をとって戦う武器ではなく、相手に近寄らなければ話にならない。
空を飛べる翼のある相手とは少々分が悪い。
とはいえ狭い塔のなかだ。相手も自由自在に飛び回れるわけではないはずだ。
二匹倒したから、残りは三。
ギャニャァァァァ！
ひと声啼いて、左手の飛び猫がエステルに襲いかかってくる。
（くうっ！）
身体をひねりながら、手にした杖を身に引きつけ、急所の首筋を狙ってきた魔獣の牙を棒のなかほどで受けた。
ガツッ！
と、手に衝撃を感じる。身体ごとぶつけられたが、辛うじて牙も爪も当たっていない。
魔獣の真っ赤な口が、エステルの顔から、ほんの小指二本ほど先にあった。ぞっとして肌が粟立ってしまう。牙から滴る涎がはっきり見えた。開いた口内から伸びる赤い舌も。その奥の喉がごくりと蠢くのも。

互いの視線がぶつかる。

魔獣が嗤（わら）った気がした。

思い切って力任せに杖を振り、飛び猫を払い落とす。床に叩きつけられる前に翼を振って、そいつは宙へと戻った。

「今度は――こっちの番なんだからぁ！」

一気に踏み込み、杖を振りかぶる。

そいつは翼を羽ばたかせて間合いの外へと浮き上がった。

（甘い！）

エステルは振り上げた勢いを使って、なかほどで掴んでいた白木の杖を手のなかですっと滑らせる。

杖の端を掴めば、二の腕ぶんほど届く距離が伸びた。棍という武器は間合いが変化するのが特徴なのだ。振りかぶった勢いを乗せて、杖の先端を、外へと逃げた飛び猫の腹へと叩き込む。

（手応え、あり！）

壁までふっとばされて、激突して落ちた。

動かなくなる。

その間に、ヨシュアがダークでもう一匹を倒している。

残るは一匹。

（いける！）

残った一匹と自分との彼我の距離は、六歩――三アージュ、というところ。エステルは間合いを詰めた。

床を、蹴る！

体重を乗せて振った杖を、飛び猫の腹へと叩き込んだ！

魔獣が床に叩きつけられた音だけがあがる。

悲鳴さえあげれずに、飛び猫は倒されたのだった。

「すっげえええっ！」

ルックのあげた歓声がエステルの背中から聞こえてくる。

くるりと振り返って、ルックを捕まえた。

「このおバカ！」

両の拳でルックの頭を挟み込む。そのままゲンコツをぐりぐりと押しつける。

「イテテテテッ！　イテッ！」

「あんた、パットまで引っ張りこんで、何やってんのよっ。ココがどんなに危険なところか知ってるの!?」

「イ、イタイよっ、エステルねーちゃぁああん！」

「反省・し・な・さ・い！」

今度は、頭を腕のなかに抱え込み、そのまま締めあげた。ぎりぎりぎり。
「ぎゃぁあああ！」
「この、この、この悪ガキったら！」
もちろん手加減はしていた。本気でやったらホントに泣いてしまう。まったく、心配させて。
「エステルお姉ちゃん。あの……そのへんにしてあげて……」
「大丈夫よ、パット。コイツはこのくらいしないと――」
「エステル！」
切羽詰まった声に、はっとなる。エステルは、反射的に抱えていたルックを突き飛ばし、自分から遠ざけた。
杖を掴みなおし、身体を振り向かせようとする。視野の端に、暗がりから飛び出てきたソイツが目に入った。真っ白い貝殻を幾つも重ね合わせたような大きな――。
《コーラルシェル》！
珊瑚の魔獣だ。エステル目掛けてぶつかってきた。
一瞬のことのはずなのに、エステルは妙にゆっくりと感じていた。
コーラルシェルは海からあがってきた魔獣だ。無数の小さな虫――珊瑚虫が寄り集まってできている。群体、というのだと物知りなヨシュアが前に教えてくれた。まるで大きなひとつの生き物であるかのようにふるまう。元は海の生き物のくせに地上を走り、獲物を捕らえて喰うのだった。
回避は間に合わなかった。
ひと抱えもある珊瑚虫の塊にぶつかられて倒された。エステルは尻もちをついてしまう。
身体の上にのしかかられた。
（重っ！）
手から杖が零れ落ちる。硬い床でからんと跳ねて転がった。
（しまった！）
エステルは、のしかかってくるコーラルシェルを押し返そうとした。だが大きな犬ほどもあるその身体は重くて、とてもではないが動かせない。
鎧の上でざわざわと魔獣は蠢いていた。こいつは確か――獲物の身体にぴったりと吸い付いて万を超える虫たちの小さな口で皮膚を食い破り体液をすするのだと言っていた。
全身の毛が逆立ってしまう。喉がからからに乾いた。
（生きながら喰われるなんて！）
けれど、エステルは腕ひとつ動かせない。
「エステル！」
駆け寄ってくるヨシュアの足音と声が遠い。
間に合いそうもない。

革の鎧の上からジリジリとそいつはエステルの肌の上に辿りつこうと蠢き……。
真っ白い光がエステルの視界を焼く。
重みがとれて、急に身体が軽くなった。
「……あれ？」
コーラルシェルが殻を砕かれて壁際に転がっていた。
（《魔法(アーツ)》の光……？）
誰かが放ったアーツ――導力魔法がコーラルシェルの硬い殻を砕き、弾き飛ばした。
エステルを助けてくれたのだ。
けど――誰が？
「よかった、来てくれたんだ」
ヨシュアのほっとした声が耳に入る。ということはヨシュアではない。
身体を捻って、階段のほうを見る。
男がいた。
「行動力ととっさの判断までは良かったが詰めが甘いな。用心が足りないぞ、エステル」
「と、父さん！」
助けてくれたのは、エステルとヨシュアの父だったのだ。
どうしてここに、と問う前に、ルックとパットが駆け寄っていた。

「か、かっこいい！　カシウスおじさん！　エステルの何倍もかっこいいよ！」
「すごいです！」
先ほどまでの怖がっていた表情はすっかり消えて、二人の男の子はきらきらした瞳でエステルの父を見上げていた。
エステルの父――カシウスが笑みを浮かべながら二人の頭を撫でた。
「見えざる脅威に備えるため、常に感覚を研ぎ澄ませておく。それが遊撃士の心得だ」
常に、だ。と繰り返す。
その言葉がエステルの耳にも届く。聞こえるように言ったに違いなかった。
「あう……」
反論したくてもできない。その通りだから。
「助かったよ、父さん」
ヨシュアが言った。
「まあ、守ることに関しては、おまえもまだまだということだな」
「……うん」
「さあ、町に帰るぞ、坊主ども」
「はい！」
「は、はい！」

ルックもパットも素直に頷く。カシウスとともに階段を下ってゆく。
立ち上がったエステルは、ついつい頬を膨らませてしまった。
「助けてくれたのは感謝するけど……なんか、いいところを全部持ってかれちゃった」
「はは。仕方ないよ。なんといっても、カシウス・ブライトだからね」
父の名前を特別な調子で呼んだことに、そのときのエステルは気づかなかった。
代わりにエステルは叫んだのだった。

「納得いかなーい！」

ヨシュアが隣で困った顔をしていた。
それが、エステル・ブライトとヨシュア・ブライトが準遊撃士になってから初めて解決した事件になった。

第二幕　翡翠の塔

エステルはヨシュアと共に扉を開いた。
部屋のなかに、二人の人物が向かい合わせになって座っていた。
ひとりは依頼人の市長だ。人の良いおじさん、という印象の男性で、口の周りの整えた髭がよく似合っている。
もうひとりは知らない顔の、エステルと変わらない年頃の少女だった。
「あの時計台にはそんな逸話が……。わたくし、とても感動しましたわ」
市長に向かって言って、少女は胸の前で手を合わせ瞳をうるませる。
良いところのお嬢さんっぽいな、というのがエステルの彼女に対する第一印象で、それは少女の着ている制服からも推し量れた。
白のスカートと紺のハイソックス。
ジェニス王立学園の制服だったのだ。
王立学園は、ロレントから見ればお隣にあたるルーアン地方にある全寮制の名門の高等教育学校である。

「…………おや？」
市長の顔が扉を開けたエステルとヨシュアに向く。
「おお、エステル君たちか」
「あの……例の品を届けに来たんだけど……後にしたほうがいいかな？」
「いやいや。それには及ばない。ああ、君たちにも紹介しよう。こちらはジョゼット君じゃ」
エステルの推測どおり、ジェニス王立学園の生徒だという。
「お初にお目にかかります。ジョゼット・ハールと申します」
椅子から立ち上がり、ジョゼットは丁寧にお辞儀をしてくる。
「あたしはエステル。よろしくね、ジョゼットさん」
「ヨシュアです」
エステルに続いてヨシュアもよろしくと繰り返した。
市長がエステルたちを遊撃士だと紹介すると、ジョゼットは目を輝かせ、会えて嬉しいと言った。
どうやらジョゼットのなかでは遊撃士は憧れの対象らしい。
面映ゆいものを感じてしまう。
だってまだ大した仕事はしていない。
照れ隠しにエステルは話題を変える。

「ジョゼットさんはどうしてここに？」
「わたくし、自主研究の一環として、各地の重要文化財を調べているんです」
彼女は学校の歴史の授業とは別に、王国各地の歴史について学んでいるらしい。
エステルは感心してしまった。
自分だったら、学校の勉強だけで精一杯だろう。手足を動かすほうがエステルは得意なのだ。
剣術や棒術の特別授業ならばいくらあっても苦にならないのだが。
「それで、エステル君。例の品はどれかね？」
「あ、うん。これなんだけど」
ふところから、エステルはその品を取り出した。
緑色にきらめく大きな石だ。
手のひらに乗せて見せる。
「すっごく大きいでしょ？」
「まあ、これは七耀石ですわね」
「うむ。見事じゃのう」
ジョゼットの目も市長の目も釘付けになっている。
その七耀石は、市長からの依頼で、鉱山から直接に持ってきたものだった。
七種ある七耀石のひとつ——大粒の翠耀石（エスメラス）の結晶体。

市長は、それを女王陛下への贈り物とする予定だという。押し戴くようにしてエステルから結晶を受け取ると、市長はそれを部屋の隅にある金庫にしまい込んだ。
ダイヤルを回して厳重にロックを掛ける。
緑色に輝いていた結晶が金庫のなかに消えると、エステルは、なんだか大事にしていた宝物を手放してしまったような気分になった。ほう、とため息が聞こえる。ジョゼットがまだ夢見るような瞳をしたまま、閉じた金庫の扉を見つめていた。
彼女もなんだか残念そうだ。
「これでよし、と」
市長が振り返り、エステルとヨシュアに感謝とねぎらいの言葉をかけてくる。
無事、依頼達成。
支部に報告すれば、エステルたちはまたひとつ準遊撃士から正遊撃士へと近づくことになる。
「それにしても、わたくしといくつも変わらないように見えますのに、遊撃士として市長から依頼を受けるなんて、すごいですわ」
ジョゼットが感心した声で言った。
エステルはつい頭を掻いてしまう。
「あ、いや。それは違うのよね。依頼はあたしのお父さんが受けたやつで、あたしたちは父さんの代理なんだ」

「まあ」
「どうしても外せない用事が出来たとかで、父さんはいまロレントにいないの。それで、あたしたちが代わりに依頼をこなしてるってわけ」
事実だから取り繕ってもしょうがない。
「いやいや。エステル君たちは立派に役目を果たしてくれたよ。代役なんてとんでもない。次に何か依頼するときには最初から君たちにお願いしたいくらいじゃ」
「えっ、ほんと?　やった！」
「エステル。はしゃがない」
ヨシュアに釘を刺されて、エステルは、あははと頬を掻いた。それを見て、ジョゼットが微笑む。
ちょうど話も終わっていたということで、ジョゼットとともにエステルたちは市長の部屋を出た。
ついでだからと、ジョゼットが泊っているというホテルまで送ることになった。彼女は、学校の休みを利用してロレントまで来ているらしい。もう明日には定期船でルーアンまで帰ってしまうということだ。
ジョゼットとはホテルの前で別れた。
「やー、いい子だったわね〜。良い所のお嬢さんっぽいのに、それを鼻にかけたところがないし」

「うん……」
「あれれ？　どうしたの、ヨシュア」
「エステルはさっきの気にならなかった？」
「んん？　なにが？」
「いや……気にならなかったのなら、いいんだけど」
「なになに？　何が気になるの？　お姉さんに言ってごらん。なにか気になる……って、なに、ヨシュアってばひょっとしてああいう子がタイプなの？」
「えっ？　なに変なこと言ってるのさ」
　ヨシュアが驚いた顔になる。
「隠さなくてもいいのに。ヨシュア君ってばお嬢様タイプが好みだったなんてねぇ。お姉さん、びっくりしちゃったな」
「……あのさ。そういうことじゃなくて……」
「まあ、いい子だったもんねー。清楚で上品で。さすが名門学校の生徒！」
「……にしては食い入るように見つめ過ぎだったと思うけどね……」
　小声で言ったヨシュアの言葉は、エステルの耳には届かなかった。
「えっ？」
「なんでもない。それより、ギルドに報告に行こう。父さんの代理の仕事も次で終わりだよ」

「あ、そうか。よし、気合を入れて行こうね！」
　ギルドに報告を済ませると、エステルは、最後の依頼についてさっそく尋ねようとしたけれど、すでに外は薄暗くなっていて、無理は駄目だと諭された。
「だいじょうぶよ。なるべく早くとは言われているけれど、緊急ってわけじゃないらしいからね」
　エステルは最後まで渋った。なるべく早く、父から頼まれた代理の仕事を終わらせてしまいたかったのだ。カシウス・ブライトなら、もっと早く終わらせていた、などと言われたくない。
　でも確かに、七耀石を運ぶために鉱山まで往復した疲労は身体に残っていて、ふと気を抜くとまぶたが重く感じられるのだった。休むのも仕事のうちだと説得される。
「じゃあ、明日また来ます」
　ヨシュアが言った。
　依頼人たちは、《ホテル＝ロレント》に泊って待っているとだけ聞かされた。
　ホテルの名を聞いて、一瞬だけ、さっきジョゼットと別れたところだ、と思考がかすめた。だが、それも束の間のこと。
　エステルはすぐに次の依頼に気持ちを切り替えてしまい……。
　おかげで、市長邸で起こった出来事は、すっかり頭の隅に置いてきてしまった。

† † †

明くる日。
昼少し前にはエステルとヨシュアは、《ホテル＝ロレント》へと辿りついていた。
顔なじみである受付のヴィーノへと声をかける。
「おや、エステルさん、ヨシュアさん。お久しぶり」
「ヴィーノさん、ちょっと聞きたいんだけど。リベール通信社の記者さんが、ここに泊まってるってホント？」
「よくご存じで。何かご用件でも？」
実は、とヨシュアが切り出す。
最後の依頼は、記者の取材に協力してやってくれ、というものだった。
雑誌《リベール通信》といえば、エステルの父も愛読しているリベール王国きっての大雑誌である。真面目な記事からゴシップまで内容も幅広い。
その雑誌社の取材に協力しろというのだ。
どうやら危険な場所に赴く予定があるらしい。
「ほう、カシウスさんの代わりに。それはそれは。ああでも、実はですね……。記者のお二人とも、今はホテルから外に出ておりまして、不在なのです」
「あらら」
「そうなんですか。あの、どちらに行かれたかは？」
ヨシュアの問いに、受付の青年は、二人のうちのひとりは、ホテルからさほど遠くない酒場に行ったと答えた。
「まだ昼なのに？」
エステルは目を丸くしてしまう。
「《アーベント》は昼は定食を出しているはずだよ」
「あ、そうか」
街の酒場の多くは、お酒ばかりを飲ませているわけではなくて、昼はふつうに食事処として商っているのだ。
エステルたちはアーベントを覗いてみることにした。
ぼうっとホテルで待っているよりはいい。
大通りを越えた先にある酒場は、ちょうど昼時ということもあって賑わっていた。
扉を開けると、客たちのざわめきがエステルたちを包む。揚げたばかりの山盛りのポテトを大皿に載せたウェイトレスが前をよぎった。焦げた油の良い匂いが鼻をつく。
「お腹が鳴っちゃうかも」
「エステルってば意地汚いよ」
「む。そんなことないもん」
「どうだか」

肩をすくめるヨシュアから視線を逸らしながら、エステルは店内を見回す。
カウンターに見慣れない男が座っているのが目に入る。
どうしてその男に目がいったかと問われれば、服装と雰囲気と答えただろう。ロレントは小さな街で、どちらかといえば田舎にあたる。
その男の服は、都会でしか売っていないような流行りのスーツを着ていたのだ。王都か、ボース市にあるという巨大なマーケットで買えるような。
リベール通信社は、王都にある出版社だ。ひょっとしてと思ったわけだ。
ただ、その男に近づいていくにつれて、エステルは徐々に不安になっていった。
（こ、このひとでいいのかな？）
確かに仕立てのいい服だった。
だが、近づいてよく見れば、物こそ良いものの、着こなしはサイアクに近い。
服は着ジワでよれよれだし、前のボタンはぜんぶ外しているし、ネクタイはゆるゆるで辛うじてひっかけただけという有様だ。
おまけに顔には無精ひげを生やしている。
目つきも悪かった。
（こ、これは……ちょっと。違うかなー）
人を見た目で判断してはいけないとは思うものの。

「あん、何だお前さんたちは？」
ぎろりと睨んでくる。
ちょっと怖い。
「えっと、まさかと思うんだけど。あの……あなた……」
「んだよ？」
おまけに柄まで悪いとは。
「ひょっとして、リベール通信の記者さん？」
「その通りだが……」
「えっ、ほんとに！」
あまりに意外だったので二の句が継げなくなったエステルを、男はまたも睨んでくる。
「何か用か？」
返事を言いよどむエステルをヨシュアがフォローしてくれた。
「遊撃士協会から来ました。護衛の依頼をされたそうですね？」
ヨシュアの言葉に、男は一転して表情をゆるませた。
「ようやく来たか！　で、噂の遊撃士、カシウス・ブライトはどこだよ？　ついでにインタビューのひとつでも取れりゃ、一石二鳥——」
「あー、それなんだけど……。本人、別の仕事が入っちゃったの。それでロレントを離れちゃ

って……」
「んだとぉ？　そんな話は聞いてねえぞ」
「ごめんなさい。でも、あたしたちがしっかりと代わりを務めるから」
　エステルがそう答えると、記者の男はぽかんと口を開いた。
「はあ？　お前らがぁ？」
「そう」
「こんなガキどもが遊撃士？　俺たちの仕事を手伝うってのか？」
「ガ、ガキって何よ。失礼ね」
「スカートも履いてねえ、色気のねえガキじゃねえか」
　上から下までエステルを無遠慮に眺めまわしてから言った。
「これは棒術家のちゃんとした胴着なの！　失礼なオジサンね……」
「オジ……。ちょっと待ちやがれ！　聞き捨てならねえ。お、俺はまだ二十代だ！」
「いくつ？」
「二十九！」
「誤差の範囲じゃない。ね、ヨシュア。そう思うよね」
「僕に同意を求めてどうする気さ。……とにかく記者さん。僕たちはギルドからちゃんと派遣されてきたんです。他の仲間に頼むこともできますが、その場合は、いつになるか判りませんよ？」
　ヨシュアに冷静に指摘されて記者の男はううむと唸って考えこんだ。
「仕方ねえ。これ以上は締切を伸ばせねえし」
　悔しそうにそう言った。
　締切とはよほど怖いものに違いない。
「ではそういうことで。……僕はヨシュアといいます。彼女はエステル」
「リベール通信のナイアル・バーンズだ」
「で、どこに案内すればいいの？　たしか危険な場所に取材に行きたいって話だったと思うけど」
　エステルの問いに、ナイアルが答える。
「ああ。知ってるかどうかわからねえが。《翡翠の塔》って名前の古い遺跡だ」
「《翡翠の塔》？」
「ああ。知ってるのか？」
「それなら、ついこの前、入ったばかりよ」
「おっ。そいつは都合がいい。俺と、もうひとり、相棒のカメラマンがいるんだけどよ。俺たちをその塔のてっぺんまで連れていって欲しいんだ」
「塔の頂上まで、ですか？」

　ヨシュアが確認する。
「雑誌に載せる写真を撮りたいんでね」
「ふーん。物好きねえ」
「わかりました。案内と護衛を務めさせていただきます。それで、その相棒のカメラマンの方は……？」
「オーバルカメラの調子が悪いんでね。工房で見てもらってるはずなんだが……」
　急ぎなら迎えに行ったほうがいいのでは、とヨシュアが提案し、工房に行ってカメラマンと合流してから、エステルたちはロレントの街を出た。
　すでに昼をまわっていたが、まだ充分に塔まで往復できる時間で、エステルたちは急ぎ足で《翡翠の塔》を目指したのだった。

†　†　†

　一時間ほどで、エステルたち四人は無事に《翡翠の塔》までやってきた。
　つい先だっても訪れたばかりの場所だ。あのときは緊急事態で成り行きだった。それが今度は正式な任務で訪れている。なんとなく不思議な感じがしてしまう。
　蒼空を背景に翠色に輝く円筒形の塔をエステルは見上げる。

　古代の文明の遺跡――《翡翠の塔》。
　遥かな過去から、ずっとここに佇んでいる……。
　この謎の塔を目の前にして、エステルは、リベール通信のカメラマンに驚かされることになった。
「おおっ、いい顔してますねー」
　カメラを**建物に向かって**構えた第一声がそれだった。
「セクシーですねぇ。とってもキュートですぅ！」
　塔の前をうろうろしながら、ファインダーを覗いては盛んに塔に向かって声を掛けている。
　時折シャッターを切る音が鳴り響いた。
「行きますよー、ハイ、チーズ。そうそう。もっと笑ってー。あー、いいですねえ。とってもチャーミングですよぅ！」
　塔に向かって、だった。
　決して、塔を背景にして誰かが被写体となっているわけではない。
「笑って、とか……。じ、人物を撮ってるわけじゃないのに……」
「でも、違和感はないよね……」
　オーバルカメラを操っているカメラマンの名は、ドロシー・ハイアット。
　エステルより四つほど年上の女性だった。ほんにゃりとした柔らかい顔立ちに独特の丸い眼

鏡をかけている。

　黙っていれば落ち着いたおとなの女性に見えないこともない。

あくまで、黙っていれば、だったが。

そういえば、とエステルは思い返す。

塔に辿りつくまでの道中でも、ドロシーは珍しいものを見つけるたびに声をあげ、道をそれて首を突っ込もうとするので、そのたびにナイアルに首根っこを掴まれて引き戻され怒られていた。

　カメラをポーチから取り出し何か叫びながら走ろうとしていたっけ。

　道中も、こういうことをしたかったわけか、と理解する。

「あいつには、景色の〝表情〟が見えるんだとさ」

　ナイアルが言った。

「表情が？　あ、うん、なるほど……ええと？」

「遠慮しなくていいぞ。俺もそれがどういうことかわかってるわけじゃないからな。解説なんてできねぇよ。けどな、あんなアホなやり方で、息を飲むような写真を撮りやがる。ま、一種の天才だわな」

「天才……。はあ、人は見かけによらないわね」

　ドロシーはひととおりシャッターを切ると、満足したのか小走りになってエステルたちの元

に戻ってきた。

　肩から提げたポーチのなかへとカメラを戻しつつ、ちらりと塔を見あげてつぶやく。

「これって、何階建てなのでしょう？」

「うーん。五、六階だと思うけど」

　エステルにはそう見える。

「五階建てのはずだよ。ウチにある資料に書いてあった。この塔とそっくりな塔は大陸のあちこちにあるみたいだね」

「その通りだ。ボースやルーアン、ツァイス地方にも、これと同じ様式の古代の塔が建っているらしい。リベール王国が建国された時代のものらしいとさ」

　ナイアルが付け足した。

「建国の……。それってずいぶん前よね？」

「千年以上前になるね」

　ヨシュアが蘊蓄を披露した。彼は本を読むのが好きで、歴史的なできごともよく覚えていて、時折こうして教えてくれる。

「千年かあ。歴史のロマンを感じちゃうわね」

「そういうことを伝えるのが俺たちの今回の仕事でな」

「ロマンを？」

「まあ、それもひっくるめて全部だな。ロマンとか歴史とか……謎とか。さて、なかに入るとするか。頼んだぜ、新米遊撃士ども」
「任せなさいって！」
　胸を張って言ったものの、塔に入る直前になってエステルは少しだけ不安になってしまう。冷たい氷を胃のなかに流し込んだような気分だ。
　前回は二階までしか昇っていないし、最後の最後で父親に助けられてしまった。今回は父はいない。そして、てっぺんまで昇らなければいけない。
　ヨシュアが言った。
「基本的に戦いは避ける方向で行きます。いちいち魔獣たちと戦っていては時間がかかりますから。彼らに見つからないように、隠れつつ進むつもりです」
「そうしてくれ。日が落ちる前に辿りつかねえと写真が撮れなくなっちまう。こんな遺跡のなかで夜を明かすなんて、ぞっとしねえからな」
　ナイアルもとくに反対はないようだった。
　そして、そこでみな口をつぐむ。
　ここから先は、魔獣がうろつく遺跡のなかだ。不用意に声を出すことは避けなければならなかった。
　みな押し黙ったまま、遺跡の入口をくぐる。

　魔獣、と呼ばれる獣は、犬や猫のような街中でもよく見かける動物たちと違って、もっと凶暴で、変わった力をもっている生き物たちを指す。大陸には多種多様の魔獣たちがいるが、どの一匹を取っても、けっして侮ってよい生き物ではない。
　戦えば、それなりに自分たちも傷つくことを覚悟しなければならない。
　護衛は好戦的であってはならない。それは遊撃士の資格を取るために学んでいれば、最初のほうで教わることだった。
　ルックとパットを追ったときにも使った階段を昇って二階へと上がった。そこまでは、がらんとしているだけの古い建物だ。空気も淀んでいて黴の匂いがする。
　上のほうから獣の叫び声らしきものが聞こえてくるもののまだ危険はなかった。
　それでもあたりに絶えず注意を払いながら進む。
　明りは、壁から燭台のように突き出している照明装置の放つ魔法の光に頼った。
　背負い袋のなかに、手に持てる簡易の導力灯もあるものの、それでわざわざ手を塞いでしまうのは避けたかった。使うのは、魔法の光が消えたらでいい。
　古代の遺跡のどこででも同じらしいが、古い遺跡は導力魔法を利用した灯りが点いたままになっているのだ。
　先ほどのヨシュアの薀蓄によれば、遺跡は千年以上前のものだそうだから、これらの明かりはざっと千年間も点きっぱなしということになる。

一千年——気の遠くなるような時間だ。
およそ五十年前に始まった導力革命は、人々の暮らしを劇的に進歩させたが、それでもこうして古代の遺跡のいまだ解明されない機械の数々を見ると、果たして自分たちがどれほど先に進んだのかわからなくなる……。
塔の二階に昇ったところから雰囲気が変わった。
前にも戦った飛び猫やコーラルシェルの蠢く姿が影のなかに見えた。
壁沿いにゆっくりとエステルたちは先へと進む。
常に壁を背負うことは重要なことだった。壁のあるほうからは不意打ちを避けられるからだ。
上下する階段は、どうやら塔の外周部にだけあるらしく、しかも、ひとつの階段では一階層しか昇ることができなかった。
つまり、ひとつ上に昇ると、同じ階のわざわざ別の場所に設置されている階段を見つけて、そこまで回ってから昇らないといけない。
「なんで、こんな造りになってるんだろう?」
最上階らしきところまで辿りついてひと休みになったとき、エステルは疑問をぶつけてみた。
もちろん休みといっても、壁の隅で車座になって、ちょっと腰を下ろすだけだが。
「塔じゃないのかもしれないな」
ヨシュアがぽつりと言った。

† † †

「塔じゃない、だと?」
ナイアルがいぶかしげに言った。
「確信があるわけではないですが……」
「塔じゃなかったら、何なの?」
「僕もそこまではわからないよ。ただエステル、塔って何のために建てられると思う?」
そう問われて、エステルは躊躇せずに答える。
「住むためでしょ」
「さすがエステルだね」
「む。誉められてる気がしないんだけど」
「シンプルでいいなって思っただけさ。それに間違ってはいないと思うよ。ただここで聞いているのは、どうして塔でなければいけないのかっていうこと」
「どうして、ってどういう……?」
「上に伸ばすのはどうしてかってことだろう? 平屋や二階建てじゃなくて、どうして高い建物を造らなければならないのかってことだ。まあ、第一には建てたい場所に空き地がない場合

だな」
　ナイアルに言われて、ようやくエステルにもピンときた。
「そっか。狭い場所しかなかったら、上に増やしていくしかないものね」
「そういうこと。でも、それだけじゃない。塔であることには、三つくらい利点があるんだ。エステル、わかる？」
「ええ!?　うーん」
　エステルは少し考えてみたが「狭い場所を利用できる」以外を思いつかない。そもそも、彼女はあまり謎解きの類が得意ではないのだ。
　話を聞いているのかいないのかわからなかったドロシーが、不意に膝を乗り出してきて、立てた指を左右に振りながら口を開いた。
「高い塔はですねえ。とってもおおらかさんな顔を見せてくれるんですよ！」
「は？」
　訳がわからない。
「眺めがいいってことだろ」
「それです！　それを言いたかったんですよぉ。さすがはナイアル先輩です！　まさに以心伝心。わたしたち相性ばっちりですねー」
「それだけは断固拒否する」

　きっぱりとナイアルが宣言した。
「あうう。その言い方はあんまりですよぉ」
　しょんぼりとしてしまうドロシーが、年上ながらちょっと可愛いとエステルは思ってしまった。
「まあでも、それが二つめの利点だね。昇れば、遠くまで見ることができる。お城の見張り塔（ウォッチ・タワー）とかを思い出してごらん」
「ああ……そうか。そうだね」
　納得だ。
「つまり、塔は住むためだけに造られるとは限らない。遠くまで見張るために建てられることもあるわけだ。この塔も、人が住んでいたような感じがしないだろ」
　ヨシュアが言って、階段の周りに視線を巡らせた。
　確かに、ここには人が暮らしていた形跡がいっさいない。机も椅子もベッドもないし、水場らしきところも見当たらない。水場っていうのは、ようするに調理場とかお風呂とかトイレとかだ。
　なによりも、こんなふうに床がところどころ抜けてしまっていて、身を乗り出せば落ちてしまいそうなところに住む物好きはいないだろう。
「それって、ここが見張り塔だってこと？」

エステルが言って、ヨシュアが首を左右に振った。

「違うと思う。だって、ここから何を見張るのさ」

「建国期にこのあたりに町とか鉱山があったってぇ話も聞かないしな」

ヨシュアの言葉を、ナイアルが裏付けた。

「なるほどねー。ええと……。で、塔の利点の三つめって何なの？」

ヨシュアがちょっとだけ言い淀んだ。それから、口を開く。

「逃げられないように閉じ込めやすいってことかな」

「え？」

「身分の高い捕虜や罪人を閉じ込めるために使うのさ。孤立しているから監視しやすいし、高いところに閉じ込めれば脱出しにくいだろう？　まさか窓から飛び降りて逃げるわけにもいかないからね」

ヨシュアの言葉を聞いて、塔のなかに閉じ込められた姫君のおとぎ話を思い出した。

「そんな顔しないで、エステル。この塔はそういうのとも違うと思うよ。まあ……とにかくそんな必要がないなら、わざわざ塔を造る理由は薄いのさ」

「ふふん。やるじゃねえか。新米でも遊撃士だな。ようするに塔として利用しているように見えないから、塔じゃないかもしれないってわけだな」

「そうです」

「住むためでもない。遠くまで見張るためでもない。閉じ込めるためでもない。で、おまえさんは、この《翡翠の塔》の正体は何だと思うんだ？」

「それは……」

ヨシュアの返す答えをエステルは結局、聞けずじまいに終わった。ナイアルに促されて、ヨシュアが口を開こうとしたときだった。背筋にぞくりと冷たいものが走り、同時に――。

「伏せて！」

ヨシュアが叫んで、隣にいたドロシーをかばった。

ほぼ同時にエステルもナイアルも身を伏せる。

エステルたちの頭の上を何かがよぎった！　髪が風圧でなびく。少し遅れて生臭い匂いが鼻先をかすめた。

頭上を越えて階段のほうへと飛んでいった何ものかを見つめる。

「《ラバートラッパー》！」

ヨシュアがうめくように言った。

階段の手前でそいつは振り返った。

床から一アージュほどのところに羽もないのに浮いている。

「なっ……魚!?」

流線形なそいつの青い身体は魚そっくりだったのだ。水もないのに、空中で身体をゆらゆら

と揺らしている。
昇り階段の前で、エステルたちを通せんぼするかのように立ち塞がった。
倒さなければ、どうやら屋上へは行けないようだ。

† † †

コーラルシェルが海から上がってきた魔獣であるように、ラバートラッパーもまた海から来たりし魔獣だった。
すぼまった口元から尾びれの先まで二アージュほどもある空を飛ぶ巨大な魚だ。
相手の先制攻撃（ファーストアタック）を何とか避けたものの、不意を突かれてエステルたちは後手に回ってしまっている。
「早く決着をつけたほうがいいね……」
ヨシュアが言った。
戦いの物音は予期せぬ他の魔獣を引き寄せかねないからだ。
「任せて！　ナイアルさん、ドロシーさん、できるだけ壁のほうに下がってて！」
二人に魔獣から遠ざかるように言ってから、エステルはパイルロッドを構えた。
パイルロッドは、両端に補強用の金輪がはめられた棒術用の武具だ。前に持っていた白木の

杖に比べると、敵に当てたときの衝撃が大きくなる。
そのぶんだけ重くなるわけだが、今のエステルにはちょうどよかった。
（少なくとも……）
ぐっと棒を握る手に力を込める。
（前にここで戦ったときよりも、増した重さのぶんだけ成長してるんだ！）
だからこの重みが今はありがたい。
父の助けが絶対に来ないことをわかっていても戦える！
「いやああああ！」
エステルはひと声叫ぶと、床を蹴ってラバートラッパーの元まで駆け寄った。
一気に間合いを詰め、パイルロッドを振りかぶる。
気合を込めて叩きつけた！
「なッ！」
ぬるり、と。
ラバートラッパーがまるでここが水中であるかのように身をくねらせた。エステルの杖が空を切る。
エステルは勢い余ってたたらを踏んだ。一歩、二歩と身体のバランスを崩したまま泳ぐように歩いてしまう。

次の瞬間に、背中に衝撃を感じて吹っ飛ばされた。
「エステル！」
一瞬だが、両足ともが床から離れていた。宙に身体が浮いてから、激しく石の床に叩きつけられる。
「あう！　くっ！　手が……！」
左手を身体の下に巻き込んだまま倒れた。変な方向にひねったらしく、痛みに思わず顔が歪んでしまう。
「来てるぞ、嬢ちゃん！」
ナイアルの切羽つまった声にエステルは辛うじて目を開いて顔をあげる。
肌が粟立った。
エステルに向かって飛びかかってくる巨大魚の姿が見えた。
「やられて――」
必死になって身体を転がした。
「――たまるかっての！」
ガツン、と先ほどまでエステルの倒れていた床にラバートラッパーが激突していた。
ガチッと歯を噛みあわせる音が響いた。
「ひゃあ！　魚というより、サメさんですよぅ！」

「サメも魚だぞ、ドロシー」
「おお？」
「どっちだっていいわよ。こんなヤツ……！」
まだ痺れている左手をかばいつつ、エステルはなんとか身体を起こした。
杖を構えなおす。
「エステル」
静かなヨシュアの声にちらりと視線を投げる。
ヨシュアの顔から表情が消えていた。冷めた瞳でラバートラッパーを見ている。
彼は怒っていた。
エステルにはわかる。
「隙を……」
ヨシュアが小さな声で言った。
攻撃するから、隙をつくってくれ、という意味だ。
「うん」
短く了解の返事をする。
じりっと、エステルは足をすべらせて、有利な位置を確保しようと動く。棒術の長所は間合いを変えられるところだが、狭い場所だとあまり大振りできないからせっかくの利点が消えて

しまう。
ラバートラッパーは今、背中を壁につけたところに浮いていて、このまままっすぐに突っ込んでも、大きく振りまわしてロッドを当てることはできない。
パイルロッドの先端が壁に当たってしまうからだ。
巨大魚の動きは、まるでエステルの次の攻撃を読んでいるかのようだ。
(でも、それならそれで、やりようがあるのよね)
床を、蹴った！
ふたたび間合いを詰める。
近寄りながら、エステルは振りかぶる代わりに、杖を思い切り引いた。
そして——痛む左手を添えながら、背中のほういっぱいまで引いた杖を、まっすぐにラバートラッパーへと向かって突き出す。
棒術は叩くだけではない。
突く、こともできるのだ。
ラバートラッパーはようやくエステルが何をしようとしているかを察したようだ。
だが——。
「遅い！　もらったああ！」
渾身の力をこめて、エステルはパイルロッドを突きだす。

身をよじった巨大魚の鼻先をかすめ、エステルの得物は頬のエラの辺りを直撃する。
ギィィィィ！
魚らしからぬ苦痛に満ちた声を上げて、ラバートラッパーが暴れた。
尾を無茶苦茶に振り、身体をばたつかせる。
エステルから慌てて遠ざかった。
怪魚は離れて体勢を整えようとしたのだ。
だが、魔獣の逃げた先へと、音もなくヨシュアがすべりこんだ。魔獣にのみ聞こえるような声で囁く。
「彼女に傷をつけたな?」
その声を聞いたのはただ魔獣だけだった。クナイと呼ばれるヨシュアのもつ短い剣が右手と左手で交互に一閃する。
悲鳴ひとつも発することができず。
塔の薄闇のなかで、ラバートラッパーは一瞬、硬直したように動きを止め。
それから、まるで導力が切れたかのようにどさりと床に落ちた。
もう動かない。
「はああ。あぶなかったぁ」
「エステル、手を見せてごらん」

「えっ？　あ、だ、大丈夫だから。ちょっとひねっただけだし」
「だめだよ。手当をしないと」
「エステルちゃん、わたし、湿布を持ってるよ」
駆け寄ってきたドロシーが、ポーチを漁って取り出した。
ガラス瓶から垂らした薬を布に染みこませて巻きつける。
「用意がいいわね」
「けっこう、このお仕事って、肩が凝るんですよぅ」
「年寄りくさいこと言ってんじゃねえよ……。まあ、こいつはシャッターチャンスを待つとかで、平気で二、三時間、飲まず食わず動かずでカメラ構えていたりするからな」
ナイアルが言った。
「へえ」
「打ち身は、すぐに冷やすのが肝心だって言いますからぁ」
「ありがとう」
素直にドロシーに礼を言う。
ひんやりとしていてエステルは気持ちよかった。熱くなっていた手の痛みが少しだけ消えた気がする。匂いのきつい薬で、魔獣に嗅ぎつけられそうで、探索の最中に貼るのは躊躇するところだけれど、幸い、もう階段を昇れば屋上なのはわかっていた。

帰りは――またそのときに考えればいい。
屋上に向かう階段を昇った。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.108

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



① 3名様 『閃の軌跡Ⅳ』特製miniトートバッグ

『閃の軌跡IV』のキービジュアルをモチーフにした非売品のオリジナルminiトートバッグを3名にプレゼント!!



② 2名様 『イース』革製コースター

超豪華な革製のコースターを各１名計２名にプレゼント。応募の際は、お好きな色を「赤」か「茶」と、ご指定ください。

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.108プレゼント係

１：お名前（ペンネーム可）
２：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→
　（記事一覧から１つずつ）
３：『創の軌跡』で特務支援課メンバーの中で注目しているのは？
　『創の軌跡』でクロスベルの住民で注目しているのは？
４：希望するプレゼント番号
５：ご意見・ご感想など

記事一覧

１：創の軌跡最新情報
２：英雄伝説 空の軌跡SC
　～絆の在り処～
３：ファルコムニュース
４：暁の軌跡最新情報
５：英雄伝説 空の軌跡

応募締め切り　2月26日(水)

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。